韓国の日本思想受容の問題点

尹　健次

日本書籍の翻訳・出版

ここしばらくのあいだ，韓国では日本書籍の翻訳・出版が目立つようになってきた。漫画や大衆小説などはすでに1970年代からかなり翻訳・出版されてきたが，現在はこれまであまりみられなかった社会科学の本が刊行されていることに特徴がある。

具体的には，丸山真男『日本政治思想史研究』(翻訳刊行，1995年)，『現代政治の思想と行動』(1997年)，『日本の思想』(1998年)，『忠誠と反逆：転換期日本の精神史的位相』(1998年)，加藤周一『日本人とは何か』(1997年)，藤田省三『全体主義の時代経験』(1998年)，柄谷行人『日本近代文学の起源』(1997年)，『隠喩としての建築：言語，数，貨幣』(1998年)，『探求1-3』(1998年)，『マルクスその可能性の中心』(1999年)，加藤典洋『謝罪と妄言のあいだで：戦後日本の解剖』(1998年，原題『敗戦後論』)，鈴木正幸『近代日本の天皇制』(1998年)，今村仁司『近代性の構造』(1999年)，それに小森陽一・高橋哲哉編著『国家主義を超えて』(1999年，原題『ナショナル・ヒストリーを超えて』)などである。

これらの本のなかには文学史ないし文学理論および人文科学に属するものもあるが，全体としては社会科学の本として分類してよく，数年前までの韓国の出版事情では考えられなかった現象である。韓国における日本書籍の翻訳は，1970年代から80年代にかけて一時隆盛期を迎えたことがある。軍事独裁政権に対抗する民主化運動が展開されるなか，その思想的探求の一環として日本のマルクス主義関係の書籍や政治・経済関係，またアジアやラテンアメリカなど，第三世界の解放闘争に関する書籍がかなりの数で紹介された。しかしそれ以後は，日本思想の受容という意味では，日本文学ブームをもたらした吉本ばななやフランス思想流行の一因ともなった浅田彰などの翻訳書が，韓国の若い小説家やポストモダン流の哲学者たちに一定の影響を与えたことはあった。

しかし今回の社会科学書の翻訳・出版は，そうした前史とはまた別の意味で，日本思想のより本格的な受容を示すもので，それだけ韓国の知性に与える影響は大きいものと思われる。社会科学の本ではこの間，姜尚中『オリエンタリズムを超えて』(1997年)や尹健次『日本：その国家・民族・国民』(1997年)など，在日朝鮮人の手になる日本書籍も翻訳・出版されたが，これらは日本人の著作とはまた別の意味合いをもつものと考えてよい。

上にあげた日本書籍の翻訳・出版と重なる形で韓国人の手になる日本関係書籍の出版もかなり目立つようになっている。たとえば，『日本の本質を再び問う』(1996年)，『反日その新しい始まり』(1997年)，『日本人と天皇』(1997年)，『箸の間から見た日本文化』(1997年)，『韓国と日本』(1997年)，『わたしは日本文化が面白い』(1998年)など，年を追うごとにその数は増えている。ただこれらは研究者や外交官などそれなりに「専門家」の著作であるといっても，その多くは一般読者向けの「大衆性」に重点をおいたもので，やはり純粋に社会科学の本というわけにはいかない。むしろ朴英宰・朴忠錫・金容徳共著『19世紀日本の近代化』(1997年)や鄭在貞『日本の論理』および『韓国の論理』(ともに1998年)が，日本の近代化や歴史教育・歴史認識の問題を扱った専門書として，これまでの日本研究を一歩進める学問的価値をもっている。

日本による植民地統治，そして南北分断と朝鮮戦争，さらに分断の固定化という歴史の歩みのなかで，韓国において日本書籍の翻訳・出版のみな

らず，日本研究そのものが大きな困難を抱えてきたことは周知の事実である。近代日本の自己像が西欧やアジアを他者として形成されたことは言うまでもないが，その近代日本のアイデンティティは，意識するとしないとにかかわらず，朝鮮・朝鮮人をもっとも否定的な他者として追求したものである。当然，朝鮮・朝鮮人にとって，日本・日本人を見る眼は厳しくなり，そのアイデンティティ形成も日本・日本人の存在によって大きく歪められることになった。

1945年8月の「解放」は民主主義的な新国家建設のスタートを意味したが，それは日本の植民地支配体制，つまり日本帝国主義（「日帝」）の克服を重要な課題とするものであった。しかし南半部を占領したアメリカ軍は軍政機構に「親日派」を引き入れ，ついで李承晩も大韓民国建国の過程で多数の親日派を登用し，社会の隅々にまで浸透していた日帝の残滓は浄化される機会もなく，温存されていった。建国後「反民族行為処罰法（反民法）」の制定，「反民族行為特別調査委員会（反民特委）」の設置にもかかわらず，親日派追放の試みはうやむやに終わり，米ソ冷戦の激化，朝鮮戦争の勃発で，韓国で日帝を省みる作業は事実上放棄されざるをえなかった。その後の軍事独裁政権も基本的には親日派によって占められ，韓国人にとって日本・日本人をありのままに見ることはきわめて困難なこととなった。日本・日本人について語ることは，民衆のあいだに根付いた反軍事独裁および反日の意識のために，すぐさま親日派と指弾される社会的雰囲気が持続した。そこには他律的に植民地を放棄した日本が，朝鮮・朝鮮人にたいしてなんら植民地支配の責任をとらないことにたいする反発も作用していた。

親米一辺倒の韓国ジャーナリズムがそれなりに日本を論じはじめたのは1960年頃からである。韓日会談の進展と59年の在日朝鮮人の「北送」がその契機であったが，しかし日本研究という意味では65年の韓日国交正常化以後，70年代，80年代の民主化運動の全期間をとおして不振をつづけた。韓国内で活字になった日本論の多くはジャーナリストの手になる体制内的・情緒的なものに限られ，日本研究のための研究機関も一部の大学における日本語・日本文学科を除いてはほとんどない状態であった。こうして毎年8月になると「知日」や「克日」が話題となり，日本の消費物資や大衆文化が氾濫しても，日本に関する専門書籍は少なく，日本を体系的・総合的に分析・把握しようとする学問的蓄積もほとんどない状況がつづいた。

事実，1990年8月16日付『朝鮮日報』，および翌91年8月13日付『東亜日報』はともに，韓国における日本研究がいかに貧弱なものであるかを慨嘆する特集を組んでいる。もっとも韓国における日本研究の不振は，必ずしも研究者の不足に理由があったとは思われない。細々ながらも日本との学術交流は進められ，日本に対する学問的関心も高かった。ただそうした研究者を育て，受け容れる研究機関が「親日的」軍事独裁政権の持続などによって，社会的に受け入れられなかったことに大きな理由がある。個別的にみるなら，前近代を中心とする歴史はもちろんのこと，政治，経済，歴史教育に関する研究はそれなりに発表され，とりわけ日本語・日本文学の領域では少なからぬ研究成果が見られた。ただ，現在の社会科学書の翻訳・出版につながる動きという意味では，やはり80年代以降，日本留学者の増大を背景に，ようやく90年代はじめに日本研究の成果が活字化されたことに始まると思われる。

雑誌『経済と社会』が1991年冬号から3回にわたって石田雄著『日本の社会科学』（東京大学出版会，1984年）を要約して紹介しているが，これが日本の知性史，とくに日本の社会科学の流れを体系的に整理した最初の論稿であるのかも知れない。

この石田の本は書名どおりに，戦後日本の社会科学をいわゆる「近代主義」を中心に総括し，新たな展望を模索しようとしたものである。本の内容を示すキーワードとしては，「社会科学」「国家」「国民」「民族」「階級」「民衆」「マルクス主義」「市民社会論」「丸山真男」「大塚久雄」などがあげられるが，この本が韓国に紹介されたことの意義は大きい。ただ訳者の韓栄恵が要約を終えた後の問題提起の部分で，石田の著書全体にたいしてきわめて否定的な評価をしているのが気になる。つま

り石田にとって，大塚久雄と丸山真男に代表される戦後日本の社会科学思想は一つの理想でしかなく，根本的には石田はその社会科学思想を相対化しえず，その論理的批判は遮断されている，と述べている。要するに今日，日本の社会科学は戦前の社会科学と違ってイデオロギー喪失，批判性の欠如の状況にあるというのである。その根底には，日本の近代をどう理解すべきか，またその近代を克服する方途は何かということへの解答が示されていないことに対する苛立ちがあるように思える。

この要約が韓国で最初に活字化された戦後日本の社会科学に関する紹介であるかどうかは不確かである。もちろん個別的にはそれまでにいくつかの紹介があったことは確かであるが，戦後日本の社会科学全般にわたるものはほとんどなかったのではないかと思われる。しかもそこで日本の第一級の社会科学者であり，しかもアジアに関心を持ち，在日朝鮮人や南北朝鮮とも連帯しようと学問的にも苦闘している良心的研究者をほぼ全面的に否定しているように見えるのには違和感を覚える。大塚久雄や丸山真男，石田雄などの社会科学の業績についてほとんどなんの研究蓄積もない韓国において，最初からこうした紹介の仕方，評価の仕方が妥当なものであったのかどうか疑問に思える。言い換えるなら，社会科学なるものはそんなに十把一絡げに論じられるものではなく，また性急に解答を求めうるものでもないのに，論述の前提にすでに何かそこに偏見のようなものが無意識的に組み込まれているのではないかという疑問である。

社会科学書翻訳の意義

韓国における外国書籍の翻訳は，『出版政策資料集 1997』（文化体育部）によると，1996 年に出版された翻訳書総数 4,834 種のうち，日本国籍をもつ著者によるものが 1,496 種で，全体の 30.9 パーセントを占めていた。アメリカ国籍の著者の翻訳書は全体の 33.3 パーセントであり，日本書籍の翻訳はそれにほぼ並ぶものである。しかし日本書籍の翻訳書の多くは文学であり，それも興味本位の大衆小説が主要部分をなしている。45 年以後，97 年までに翻訳された日本の文学作品の 70 パーセントはそうした大衆小説であり，本格的な文学作品の場合も特定の作家に偏重しているという。ちなみにこの間，韓国で最も多く翻訳されてきた日本の作家は，三浦綾子，川端康成，井上靖，芥川竜之介，大江健三郎，三島由紀夫，村上春樹の順であり，90 年代では大江と村上が多かったという（『出版ジャーナル』第 236 号，1998. 5. 20.）。

こうしたなかでの社会科学書の翻訳は，韓国にとってはたしてどんな意味があるのだろうか。翻訳書が出版されるたびに書評が各新聞に掲載されるが，日本の社会科学書の翻訳，日本思想の受容全体の問題について論じた文章は意外に少ない。そのなかで韓国のアカデミズムと最も近い関係にある『教授新聞』が日本思想の受容に少なからぬ関心をもち，それに関連する記事を掲載している（1998. 8. 31, 99. 2. 1, 99. 6. 21.）。なによりもそうした社会科学書の翻訳・出版は，学界がようやく本格的に「日本思想の解明」に入ったことを示すもので，日本思想に対する関心が深まっていく兆候であると好意的である。もとより日本研究は日本の知性史に対する理解から出発すべきものであるが，その点，研究者の日本思想解明の手法も近年繊細になりつつあり，しかも骨太い主題を扱うようになりはじめている。そこでは研究者の関心はいまや漠然とした概論から各論に移りつつあり，丸山や柄谷の翻訳書に代表されるように，無責任と無構造の伝統が生み出した日本の虚像を明らかにし，自らの内部に位置づいている他者としての「日本」を考察しようとしている，と。

日本の植民地支配を経験した韓国において，研究者の関心が天皇や天皇制，そして日本の近代化，さらには日本のナショナリズムの問題に集中するのは至極当然である。現在のところ韓国ではとくに丸山と柄谷が近代日本の諸問題と関わって関心を集めているが，それは丸山が近代日本の基軸としての「国体」の創出と取り組み，また柄谷が言語や権力の問題に注目しつつ近代日本の精神分析に力を注いでいることと関連する。

ここで『教授新聞』の記事で示された韓国における日本思想受容のレベルと問題意識のあり方を

確認しておきたい。なによりも韓国では，日本に何か学ぶべき独特の思想とか哲学があるとは認識されていない。学問，とくに社会科学といえば欧米からの輸入学問に頼ってきた学問風土のなかで，日本は特別に学ぶべき思想や理論をもたない国である。しかし植民地近代を引きずったままの韓国の知性は現実には日本についてなにも知らず，いまなお過去の不幸な関係を精神的に克服しえないことに苛立ちを覚えている。その意味で知的な他者として存在してきた日本の社会科学者の著作が翻訳書の形で書店に並びはじめたことは歓迎すべきことである。それを一時の流行にとどめさせてしまうのか，あるいはそこから韓国の社会や学問に有意味な価値を見いだすかは今後の課題であり，とりあえずは優れた著作がこなれた翻訳で出版されていくことが望ましい。つまり，これまでの翻訳・出版は個人の著作の紹介にとどまるもので，「真摯な日本理解はいまようやく始まったばかり」という段階である。また翻訳書のなかには不適当なものもあり，さらに粗雑な翻訳のために翻訳書そのものに不信感を抱くことも少なくない。

ただ，『教授新聞』におけるこうした理解とは別に，日本思想の受容に際して個別研究者の問題意識がかなり大きいことも確かである。近代日本が天皇制を創出して全国民の統合に前近代的要素を積極的に利用していったことは，反面において西欧との対決のために導入した近代的制度・思想との間に不合理な矛盾を生み出すことになった。この前近代と近代が独特な形で結合したのが「日本の思想」であり，その結節点に位置しているのが天皇である。その意味で日本思想と近代性を分析するのに天皇の問題は核心的な位置を占めることになり，それはまた「無思想・無責任」の日本のありよう，さらには日本の近代性の根源を究明していく拠り所ともなる。しかもそこにおける日本の近代性なるものは，西欧の典型的な国民国家と共有する近代性なのか，あるいは前近代性を内包した歪曲された近代性なのか，つまり今日の日本が志向すべき方途は歪曲された近代性の克服なのか，近代性そのもなのか，といった課題意識である。

こうした問題意識は当然のことながら，韓国の学問的課題と密接に関わっている。とくに過去十数年のあいだ激しく論じられてきた，韓国の「近代」は「普遍」なのか，あるいは「特殊」なのかという論争がその根底にあるのは間違いない。その点に関して言えば，韓国の近代はあくまで「植民地近代」が組み込まれたものであり，そのかつての宗主国日本は自らの内部に存在する他者であったし，いまも他者でありつづけているという理解が不可欠であるはずである。実際，日本を論じることは自らを論じることであり，日本を論じないことは自らの内部の矛盾や葛藤に眼をつぶることにつながってしまう。日本と韓国はけっして同列に，また対等に論じることのできない歴史性を帯びているのである。そのことは中国・朝鮮・日本が現実には東アジアの一つの共同体として論じることのできない，相互に差異をもった歴史的関係にあることと関わっている。

韓国で社会科学書の翻訳・出版が盛んになったことが，1998年2月に成立した金大中政権の日本文化「開放政策」となにか連動するものと思われる向きもあるが，基本的にはそれとは無関係の韓国内部の欲求にもとづくものと理解してよい。ただ韓日両国の「過去の清算」が東西の冷戦構造で長期間にわたって凍結されたままであったのは確かである。韓国では軍事独裁政権の継続と親日派の勢力持続，日本では右傾的な自民党単独政権の継続によって，植民地支配の清算は形ばかりのものにとどまってきた。しかも98年10月の金大中大統領の日本公式訪問で韓日両国の「過去」に一つの区切りがつけられたとはいえ，なお韓国の知識層や民衆のあいだに日本へのわだかまりが根強いのも事実である。論者のなかには欧州連合(EU)になぞらえて東アジア共同体の創設を主張するむきもあるが，日本と韓国，北朝鮮の溝が狭まる方向性はいっこうに見えてきていない。それどころか日本の政治はいまや保守一色に染まり，朝鮮半島有事を想定した日米安保条約の再定義と「周辺事態」関連法の整備，「日の丸・君が代」の国旗・国歌としての法制化など，アメリカ依存が強まるなかで封印されてきたナショナリズムの感情が一気に吹き出してきている。

「東アジア共同体」といえば歴史学者の姜萬吉がつねに主張してきたアジアの未来像である(『世界』1996. 1.)。その担い手は東アジアの民衆で，その基盤はアジア民衆の連帯にあるという。しかし現実にそうした連帯を阻んでいる大きな要因の一つは日本が過去の清算をしていないことにある。この過去の清算は第一義的には日本政府の責任であるが，日本の知識人の責任でもあり，とくに社会科学者の責任でもある。

政治学者の崔章集も，脱冷戦の21世紀はアジアの時代・太平洋時代になりうると展望しつつも，日本・中国・韓国のアジア三国で再び強国となった日本がなによりも過去の清算をおこなうことが不可欠であると述べている。同時に，アジア各国の市民には一国主義的・人種主義的民族主義を民主的で市民的な民族主義に転換させていく努力が求められているとして，市民的民族主義なるものの重要性を論じている。しかもそこで崔章集は，日本でその課題がとくに重要な意味をもつとしながらも，丸山真男のナショナリズム論にたいしては，それは民主主義に対する原理は強調されるが，平和の原理に対する問題意識は弱いものであると批判的である。丸山の歴史認識においては，日本のナショナリズムが1930-40年代に軍国主義の方向にいったことに批判的ではあるが，それ以前，日本の近代化が帝国主義的膨脹と軌を一にし，朝鮮侵略として表出されていったことに沈黙しているというのである(「現代韓日関係と韓国民族主義」『世界の文学』通巻80号，ソウル，1996. 5.)。

丸山真男に代表される日本の社会科学書の翻訳・出版が，アジア民衆の連帯，韓日の友好増進といった現在と未来の課題においてどんな意味をもつのかという問題がまさにここにある。それは当然，民族主義，ナショナリズムの問題とも関わってくるが，いまここではまず日本と韓国の双方で大きな論争の種となった加藤の『謝罪と妄言のあいだで』(原題『敗戦後論』講談社，1997年)をとりあげてみたい。

歴史認識の「ねじれ」

『謝罪と妄言のあいだで』が日本で最初出版されたとき，ジャーナリズムの世界では大きな話題となった。とりわけ進歩派からは世界的規模でグローバリゼーションが進行するなかで，加藤は旧来の超保守的ナショナリズムとは外見上一線を画する形で，1990年代型日本ナショナリズムの自己表出を鮮明にしたものだという批判の声が起こった。戦後の日本ではナショナリズムという言葉は一種のマイナスイメージで語りつづけられてきた。進歩派はナショナリズムの兆しにつねに目を光らせ，ナショナリズムの言説は戦前回帰・軍国主義の復活につながると警戒した。保守の側もあえて波風はたてないという態度で対応したため，「民主主義」の合い言葉のもとにナショナリズムは表面的には否定され，封印されてきた。しかし実際には経済の高度成長の影に隠れつつ，ナショナリズムはさまざまな形で内向していた。ナショナルな問題はタブーにして語らず，超保守の右翼に任せることによって，日本人一人ひとりの内面奥深くにナショナリズムの意識がかえって沈殿されていった。それがいまやアメリカへの依存・従属の限界が意識されるなか，経済不況への不安，アジアへの謝罪外交に対する不満，朝鮮有事への恐怖などによって，ネオ・ナショナリズムが日本全体を覆う形で台頭しつつある。その主張の根幹はさきの戦争は正義の戦争であり，憲法第9条の戦争放棄条項は廃棄されるべきだというものである。

この1990年代ナショナリズムの特徴はそれが主として知識人によって担われ，その知識人ナショナリズムをマスコミやジャーナリズムが煽り立てるという構図になっていることである。その点，政府・支配層が主導した80年代のナショナリズムのあり方と著しい相違があり，それだけに知識人の自戒が求められることにもなる(間宮陽介「知識人ナショナリズムの心理と生理」『神奈川大学評論』第28号，1997. 11.)。

それはともかく，植民地支配が終焉して半世紀以上もたつ今日，アジア，とくに南北・在日の朝鮮人が日本人に不信感をもつのは，日本政府が国家として明確に植民地支配・侵略戦争の謝罪をしていないこと，また日本が戦争被害者であるアジア人にたいして正当な補償をおこなっていないこ

と，そして日本の政治家が妄言を繰り返すなか，日本の世論が過去の戦争を美化しょうとする動きのためである。とくに政治家の謝罪と妄言そして撤回という愚行の繰り返しは，朝鮮人だけでなく，日本人にもある種の苛立たしさ，ないしはむなしさを与えてきたことは確かである。その根底にはたとえ侵略戦争であったとしても，戦争にかり出され，国のために死んでいった死者をどう哀悼すべきかという深刻な問いが横たわっていた。加藤はこの自国の死者に対する姿勢に，戦後日本の保守・革新の二項対立的な位相や思想的脆弱性が典型的に体現されていると考えた。しかもその基底には，「平和憲法」とされる日本国憲法の評価をめぐる「ねじれ」があるというのである。

加藤によれば日本は敗戦によって平和憲法なるものを押しつけられた。しかも日本人はこの押しつけられた憲法をさまざまな国際情勢の変動に翻弄されながらも，かろうじて自力で保持してきた。その結果，強制された憲法を半世紀以上も自分のものとして護持しつつ，日本人は実質的には憲法を憲法として尊重しない，不思議な立憲国民になってしまった。これが敗戦後の日本が抱えた「ねじれ」であるにもかかわらず，その「ねじれ」を「ねじれ」として受け止められないのが今日の日本であるという。この「ねじれ」がある限り，さきの戦争は不正義の侵略戦争となり，国のために死んでいった兵士の死は無意味となり，また戦後を生き延びた者はかつて正義と信じたものが不正義であったという「ねじれ」を抱え込んだまま生きていく以外にない。この日本社会の人格的分裂を止揚し，一個の人格に回復するためには，三百万人の自国の死者を深く追悼することを通して，二千万人の他のアジアの死者への謝罪にいたる道を案出することが必要であり，それを可能ならしめる共同的主体としての「われわれ日本人」を新しく立ち上げることが不可欠である，という。

厳密に読むなら，加藤は国家主義や国粋主義の名で呼ばれるナショナリズムの信奉者ではない。さきの戦争を侵略戦争とみ，憲法第９条の平和原則を尊重し，戦争被害者への補償を強調する点などからしても，昨今のネオ・ナショナリストとも区別される。しかし日本の死者を深く追悼することが，そのまま二千万人の他のアジアの死者への深い謝罪につながるという，自国の死者を優先した死者の弔い方が必要だと主張する限りにおいては，それをすんなりと認めるわけにはいかない。かつての宗主国日本人と戦争にかり出され被害を被った植民地人・アジア人は法律的にも平等でなかったし，実際にもさまざまな差別的処遇を強いられた。戦後でいえば，三百万人の死者の側には遺家族手当てなど経済的な処遇が行われたのにたいし，アジアの被害者はほとんど放置されてきたに等しい。しかも戦後の「ねじれ」を批判する加藤の姿勢は，実質的には戦後民主主義ににたいする全否定となるしかなく，それは現実には平和と民主主義のために闘ってきた戦後日本人とアジア人の努力をすべて否定することにつながる。彼の論理においては日本国憲法下の象徴天皇制の是非は不問に付され，事実上天皇や国家の責任は免責にされるとともに，三百万人の死者は「霊」になってまで，植民地支配者に礼を尽くし，日本中心のアジア共同体のシンボルとして意味づけられることになる。

この加藤の著作が翻訳・出版されたとき，韓国では複雑な反応が見られた。その第一の理由がこの本の評価の難しさにあったことは間違いない。それはまた，出版社である創作と批評社の白樂晴がこの本に一定の，あるいはかなりと言っていいほどの評価を与えていることに対する当惑とも関連していたと思われる。加藤は翻訳書の韓国語版序文で，この本が日本で批判にさらされているにもかかわらず，あえて翻訳を決断してくれた白樂晴に感謝の言葉を繰り返している。「白先生は東京で最初お会いしたとき，この本で指摘している戦後日本の〈ねじれ〉のような類の何かは解放後の韓国にもある。ここで話された問題を自分たちの問題としても受け入れることができると言った。恐らくこれは高いレベルでこの本を〈評価〉したくはないという儀礼的な意思の表示であったと思う。けれどもこうした姿勢をただ儀礼的なものとしてのみ受け入れるのは正しくない。どうして彼は私のような位置に立とうとするのか。そうしないと思想の相互理解が不可能だからである」，

と。

ここでは当然，二つの事柄が問題になる。一つは，白樂晴が言う韓国にもある似たような「ねじれ」とは何かであり，もう一つは，この本が日本と韓国の思想の相互理解に役立つものかどうかである。もし韓国に「ねじれ」があるとするなら，それは親日派とそれに関わる反共イデオロギーや軍事独裁政権にまつわる問題，あるいは米軍政主導の「建国」とその後の韓国の親米的歩み，さらには朝鮮戦争やベトナム戦争における死者の弔い方の問題などが考えられる。そのどれであるにしても，またそれらとはまた違うものを指すとしても，いずれにしろ韓国の現代史とそこに生きた人びとがさまざまな「ねじれ」を抱え込んでいることは間違いない。ただそれを考えるのに加藤のこの本が役立つのかどうかという問題である。そのことは二つ目の問題である，日本との思想の相互理解に有益であるのかどうかという問題とも関わってくる。

私見を言うなら，日本に加藤のような考え方があることを知るという意味では，もちろんこの翻訳書は無意味ではないであろう。しかし実際問題として，どの国にも保守派がいれば，革新がいるものである。その両者の対立を「ねじれ」だとして社会の人格的分裂を論難するなら，世界はすべて人格的分裂者の集合体になってしまう。むしろ加藤のいう「ねじれ」とは，現実には加藤の内面における「ねじれ」という性格のものである。しかも加藤の主張は，結局は侵略戦争を美化する保守派の主張を受け入れた謝罪の論理を案出することに重点がある。韓国の一般民衆はもちろんのこと，日本に関心をもつ知識人でさえも，こうした屈折した加藤の論理を正当に評価しうるのかどうかというと，その答えは否定的にならざるをえない。

日本の近現代史についての基礎的知識が乏しく，日本の情報摂取も制約され，ましてや日本の象徴天皇制のカラクリや戦争責任論の展開のされ方についてほとんど何の予備知識もないとき，心情の吐露とレトリックに満ちたこの本の持つ全体的意味を批判的に読みとることは至難の業である。むしろ実際には，韓国人の主体性を見失うマイナスの方向に作用してしまうのではないかと考えるのが妥当である。敢えていうなら，加藤を評価する白樂晴の日本観にこそ「ねじれ」があるのではないかと危惧される。

事実，この本が発売されたあと，各新聞などに掲載された書評などを読むと，こうした危惧がけっして的はずれなものでないことが分かる。『朝鮮日報』の記事 (1998. 11. 5.) は，加藤の本を簡単に要約・紹介したものである。しかしそれは，加藤は侵略戦争の主体としてはっきりと過去を謝罪する論理を構築しょうとしていると，むしろ肯定的にさえ読める文脈である。『中央日報』の「苦悶する日本の知性」と題する書評 (1998. 11. 17.) も，加藤に対して好意的である。加藤は謝罪と妄言の平行線を「歴史消化不良症」というが，その主張がどんな現実的効果をもつかは別にして，歴史に対する日本知性の苦悩を如実に示してくれるものであり，それは韓国知性の歴史に対する姿勢を反省させもしてくれる。韓国人は真実の謝罪を受けるためにも「良心的な」日本人だけでなく，「ずうずうしい」日本人の立場も理解しなければならないと，きわめて寛大である。けれども冷静に考えてみると，はたして韓国の知性は日本の良心的な知性の苦悩を知っているのであろうか。保守派の論理がいかなるものであるかについてもほんとに理解しているのであろうか。ついこの間まで，韓国の知性は，日本の保守派，右翼的人士を「親韓派」として誤認していたほどではなかったのか。

新聞の書評は短いものであるが，それだけに書評者の考え方や思想が凝縮されて描出されるものである。『出版ジャーナル』（第 249 号，1999. 1. 5.）には比較的長い書評が掲載されているが，それも事実誤認，主体性の希薄さを如実に示しているように思える。日本は左派と右派が両極化の道を走り，知性界でもこの二つの陣営の区分が明確になっていくばかりであるという。加藤は謝罪と妄言のどちら側も成熟した知識人になりえないまま，平面的な対立を繰り返してきたと診断し，それを克服する道を模索しているのであり，それは韓国の知識人も学ぶべき態度であるという。

果たしてそうであろうか。現実の日本は進歩

派・革新陣営が雪崩を打ったように崩壊し，いまやその最後の砦を保守派・右翼陣営が取り込もうとしている段階である。首都・東京は伝統的に革新色の強い大都市であるが，そこで日本保守勢力の象徴ともいうべき作家・石原慎太郎が圧倒的支持を得て知事に当選する時代である。しかしだからといって，過去の侵略の歴史を真摯に謝罪すべきだと論陣を張り，護憲・平和の運動を展開してきた孤立無援の進歩派・良心的知識人がなぜ未成熟だと指弾されなければならなのか。彼らはたしかに力は足りなかったかも知れないし，民主主義やアジア観の内実において一部批判される部分をもっていたかも知れない。しかし彼らはけっして未成熟だったと批判される存在ではない。批判されるとするなら，そのことを知らない韓国の知識人であり，彼らと連帯しえなかった韓国の知性ではないのか。そうした点では，白樂晴が日本の雑誌で「日本の戦死者への哀悼が先であるといった彼の主張が論難されたようですが，韓国人の私がこう言うと意外かも知れませんが，…私はむしろ新鮮だと感じました」(『批評空間』1998II-17) と語ったことは，たとえそれが「外交的」辞令であったとしても，韓国と日本の相互理解を進めるという意味では，もう少しその真意の説明が必要であるように思われる。

新聞に掲載された書評としては『ハンギョレ新聞』(98. 10. 27.) に掲載された「日本の〈二重人格〉の実態を見る」が，それでも加藤の本がもつ意味を日本の多様な批評を紹介しつつ論じているのが目につく。加藤が革新陣営だけでなく，保守陣営からも批判されていること，革新陣営では加藤の考えを時代錯誤のナショナリズム，ファシズムと批判していることなどを伝えている。しかし全体としてみるとき，韓国側ではやはり，加藤のこの本がもつ本質的意味をもう一つよく理解できないでいたことは確かである。そこには日本のナショナリズムのあり方や軍国主義一辺倒といわれる日本の保守派の実態をよく把握できないでいること，そしてそうした日本の保守化・右傾化を批判する進歩派・良心的知識人の存在を知りながらも，それに無条件に同調したり信頼することに一種のためらいをもつという側面もあったものと思われる。ただ幸いなことに，そうした曖昧さ，不明確さは，韓国でその後間もなく『国家主義を超えて』(原題『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会，1998年) が翻訳・出版されたことによってかなりの程度解きほぐされることになった。

日本知性の「苦悩」

『謝罪と妄言のあいだで』刊行の約半年後に出版された『国家主義を超えて』は，出版後たちまちのうちに日本の国家主義批判の書として大きな話題となった。『中央日報』は書評 (1999. 5. 20.) で「日本の良心的知識人は健在である」と大書特筆し，在日朝鮮人4人を含む18人の共同執筆になるこの本の意義を大きく褒め称えた。彼らの批判対象は「新しい歴史教科書をつくるる会」(1996年11月活動開始) と「自由主義史観研究会」(1997年7月結成) である。人でいえば，「歴史教科書」の社会運動家・西尾幹二，「自由史観」の歴史学者・藤岡信勝，それに扇動家であり漫画家である小林よしのりを含めることができる。この中で小林は漫画〈大東亜戦争〉を通じて「大東亜戦争は人類が作り出した残酷ではあったが，もっとも美しく崇高な闘いであった」「あなたたちは戦争に出るのか，あるいは日本人であることを放棄するのか」と声を荒げた人物である。そして続けて書評は，そうしたなかでこの本がなぜわれわれにとって重要なのかといえば，それは日本知識人の良心的な発言が韓国の知識人の日本に対する無関心，場合によっては漠然とした信頼がどんなに危険であるかを目覚めさせてくれるためであるからかも知れない，と指摘した。

こうしてこの『国家主義を超えて』は，韓国の各新聞で，現代日本の保守派とその右翼史観を全面的に批判する書として位置づけられていった。そこでは既存の歴史叙述を「自虐史観」と批判する藤岡の自民族中心主義的な「自由主義史観」が取り上げられ，また国民的作家とされる司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』が示す大東亜戦争肯定の歴史観への批判が紹介されもしている。『京郷新聞』の書評 (1999. 5. 24.) では，この本は「日本極右派の〈新皇国史観〉を剥ぐものである」と論じ

られているが，この本はたしかに日本における新たなナショナリズムの攻勢に対する批判の書として刊行されたものである。しかし実際には，この本はそれを超えて，民族や国民・歴史・愛国心などの語りを広い学問的視野から解剖し，「自国史」ないし「国民史」を乗り超える開かれた歴史意識を切りひらくことを意図したものと理解される。事実，執筆陣の専攻は，歴史学，言語学，政治思想史，フランス文学/思想，女性学，哲学/倫理学，日本文学，教育学，社会学，文化人類学などと多彩であり，問題の取り上げ方や切り込み方も多種多様である。その点，この本は日本の国家主義，右翼史観を批判する書としてだけではなく，一面において日本におけるポストモダニズムやカルチュラル・スタディーズ，そしてフェミニズムなど，最新流行の学問的潮流ないしは雰囲気を伝えてくれる書としても受け入れられたと考えられる。

もっともこの本の意義は何よりも，『謝罪と妄言のあいだで』が提示した日本知性の「苦悩」をどう受け止めるべきかを明確に示したことにあったと思われる。もとよりこの『国家主義を超えて』の刊行は，司馬史観や自由主義史観とともに加藤の「敗戦後論」を批判することに大きな目的があった。その点，加藤の書の意味を的確に理解できないでいた韓国の知性界にあって，この本の出版は時宜を得たものであったと評価される。『ハンギョレ新聞』は「復活する〈国家主義〉を全面的に批判」と題する書評(1999. 5. 25.)で，このことを的確に述べている。すなわち，この本の主要争点の一つは加藤典洋の〈敗戦後論〉である。わが国で『謝罪と妄言のあいだで』という書名で創作と批評社から翻訳・出版された『敗戦後論』は，白樂晴教授ら国内の進歩派の一部からも肯定的な反応を得たが，筆者たちはそろってこの本のイデオロギー的危険性を強く警告している。謝罪をする護憲派と妄言をする改憲派の対立を〈ジキルとハイド〉の人格分裂とみるのは一種の国家主義的発想であり，この人格分裂を克服するために「大東亜戦争で死んだ三百万の自国民をまず哀悼しなければならない」と主張するのも，「南京虐殺者と原爆被害者を日本人という名のもとにまったく同じに見よう」という国家主義的提案にしかすぎないというのが彼らの批判である，と。

さきに述べたように，1990年代日本のナショナリズムの底流には反米主義的な歴史解釈への傾斜が著しく見られる。政治・経済・外交のみならず，人びとの日常生活の隅々にまでにアメリカニズムが浸透して，日本・日本人なるものの意味を改めて問う衝動を呼び起こし，しかもそれは，世界的なグローバリズムと同時進行の様相を呈している。80年代，とくに90年代のポストモダン的な若者文化とジャーナリズム主導の新保守主義は相互補完的に融合することによって，いわば浮遊しかねない自己の確認のために歴史と文化のナショナルな方向での再認識＝正統性の再構築を意図しているとみてよい。言い換えれば，ナショナリズム自体，いまやムード的なものとして消費の対象とされ，したがってそのナショナリズムはかつての軍国主義や国家主義，国粋主義のように危険なもの，侵略的なものとは感知されにくい傾向が強まっている。『国家主義を超えて』が韓国の知性にとって有益だとするなら，それはナショナリズムのそうしたありようを各種学問領域の協力によって鮮明に浮かびあがらせ，韓国の学問研究のあり方に大きな示唆を与えたことにあるのではないかと思われる。

韓国の学問研究の大きな欠点の一つは各学問領域が孤立的・閉鎖的であることである。歴史学者は社会科学を知らず，社会科学者は歴史学を知らない。哲学・倫理学は自己の殻に閉じこもり，法学・教育学などは体制内に安住しているかのようである。しかし現代世界，そして韓国の現実は個別学問のみでは解明しきれないものとなっており，そこには各種学問領域の協力が不可欠であるだけでなく，学問する者の主体性の追求が不可欠の課題となっている。その意味で『国家主義を超えて』は，各種学問領域の協力，一つの問題を多様な方面から追求しうる主体性の持ち方，そして西欧学問受容の意味といったことについて貴重な示唆を与えてくれるものではないかと思われる。ただもちろん，多彩な研究者による論文集であることは一面においては，バライエティに富んだ成果を生みだしてはいるが，他面，個別の人間の悩

みや葛藤，つまり日本の知性の苦悩をさらけ出すということにはつながっていない。

その点では，ほぼ同時期に藤田省三の『全体主義の時代経験』が刊行されたことの意味は大きい。『朝鮮日報』(1998. 12. 24.) で「現代日本の最後の思想家」と紹介された知性人によるこの本は，天皇制や「安楽」という名の全体主義，転向など，戦後日本そのものと格闘してきた一人の人間の軌跡でもある。それはありきたりのインテリによる表面的な作品ではなく，日本の歴史と社会のもっとも苦痛に満ちた部分と闘い，在日朝鮮人をはじめとする少数者（マイノリティ）とも連帯しつつ，ともに戦後日本を生きてきた優れた社会科学者の証言である。当然，それは，たんなる社会科学や歴史の領域にとどまる仕事ではなく，歴史と社会，そしてそこに生きた人間の全体性を描出し，告白しようとした思想史であり，精神史である。つまり，それは歴史と社会に主体的に関わり，誠実に闘いつづけた者の苦悩であり，その意味では加藤の「苦悩」とはまったく異質のものである。

「近代性」をめぐる論議

最近の日本書籍の翻訳・出版は一つのブームと言われている。たしかにこれまであまり見られなかった社会科学書の翻訳・出版がつづくと，一つの社会現象であるかのように錯覚されてもおかしくはない。しかし実際に翻訳・出版された本の数は，ほんのわずかでしかない。1980 年代のいわゆる「理念書籍」とか「不穏書籍」と呼ばれた伝統的なマルクス主義を中心とする社会科学書の出版，そして 90 年代のポストモダニズムやポストマルクス主義など，いわゆるフランス思想の紹介を中心としたポスト主義の思想書乱造に比較すると，いまの日本思想の紹介はほんの微々たるものでしかない。個別的にみると丸山真男と柄谷行人の著作が一番多いが，それも 5, 6 冊であって，しかもそこには当然のことながら，行き場を失った出版業界の商業主義がかいま見られる。

1990 年代につながる現代韓国の転換点は 87 年であった。この年，労働者・学生の大闘争が展開され，軍部支配層は「民主化宣言」で対抗せざるを得なかった。韓国ではその後民主化が一定程度進展するなか，経済の高度成長とそれに伴う市民社会の形成がすすんだ。しかしそれもつかの間，89–91 年のソ連・東欧圏の崩壊によって左派・進歩勢力は急激な没落を余儀なくされることになった。こうして 90 年代に入ると社会科学・人文科学は衰退の一途をたどり，その間隙をぬって韓国の少なからぬ知性はフランス思想の摂取に活路を見いだそうとした。その主たる要因はマルクス主義に対する信頼性の喪失であったが，事実，マルクス主義者の一部がマルクス主義の「転化・再構成」を模索しはじめるなか，少なからぬマルクス主義者は新版近代化論やフランス思想へと急速に接近していった。その過程において，韓国の知性はこれまで信じてきた思想への根本的懐疑を抱くことによって，社会科学の根幹的テーマである「近代」や「近代性」なるものを本格的に問い始めることにもなった。

しかもこうした思想的混迷のなかで韓国は 1997 年末には再び，経済の IMF 管理という非常事態を迎え，韓国の知性もまた思想の再構築という時代の課題を背負うことになった。実際，今日の韓国では，経済の悪化にともなって左派・進歩勢力が一定程度の復活をとげるなか，さまざまな思想集団ないし勢力がうごめいている。伝統的マルクス主義の再構成を急ぐ旧左派的マルクス主義，アルチュセールを受容したアルチュセール的マルクス主義，フーコーやドゥルーズ，ガタリ，ネグリなどに依拠する新左派的マルクス主義，批判科学としてのマルクス主義を認めながら市民的民主主義を強調する左派的市民社会論，マルクス主義に批判的に接しつつフェミニズム，エコロジー（生態主義）などの市民運動を重視する非マルクス主義的急進民主主義，あるいは歴史学界などに多く見られる進歩的民族主義，そして社会民主主義論や各種自由主義論，それに保守的民族主義を含めた反共色の濃い保守思想など，いまや韓国の思想界は百花繚乱の感がある。

日本思想の紹介・受容は，こうした時代状況のもとで進んでいる。当然，重要なのはその出版点数の数ではなく，この混迷期における日本思想の質と意味である。日本は隣国ではあるが，たんな

る隣国ではない。かつての植民地宗主国であり，いまも過去の謝罪を拒否している経済大国である。南北分断の苦痛も，もとはといえば日本の責任に由来するものである。

ところで現代フランス哲学の研究者である李正雨は，今村の『近代性の構造』に対する『朝鮮日報』の書評 (Degital CHOSUN 99. 1. 27) で「近代性」なるものについて論じている。すなわち，近代性についての論議は過去数世代にわたって継続されてきた重要関心事であり，韓国においても自らの生を理解するために必ず論議しなければならない大きな問題である。この場合，近代性は 17 世紀の科学革命，18–19 世紀の啓蒙思想および主体の哲学，19 世紀に本格的に形成された民主政治，資本主義，現代文化の五つの系列に分けることができるが，これらの総合としての近代性概念をいかに樹立するのか，また空間的には西欧近代と韓国の近代，時間的には伝統–近代–脱近代を有機的に理解する筋道をいかに見いだすかが課題である。その点，今村はこれら五つの系列のうち，主として哲学/思想および政治の系列について論じ，具体的には時間，機械，統制という三つの概念を中心にして近代性の構造を解明しようとしている。

このように述べる李正雨は，その前提として，韓国にとって近代性を論議するには西欧の近代性，日本による近代化，19 世紀の自生的近代性の三つを検討することが必要であり，これら三つの問題を検討してこそ，近代性という概念の包括的な理解が可能であると述べている。それだけ韓国の近代性は複雑で，理解困難なものだというわけであるが，東アジアでいち早く近代化を唯一成し遂げた国である日本は，その点，独特な位置を占めているという。近代や近代性を論じる日本の思想家のうち，丸山真男および大江健三郎は普遍主義–近代主義者であり，柄谷行人と浅田彰は脱近代主義者であり，そこに各種形態の民族主義が加わって互いに対立していると論じている。こうした理解のもと，今村は現代なるものを考える日本の代表的な人物であり，われわれ自身を知るために日本を学ぶという意味で今村の本は重要であるという。

ここで李正雨が，韓国の近代性論議にとって西欧近代，日本近代，そして朝鮮の自生的近代を考察することが重要であるというのはまったくその通りである。現代の視点では，そこに解放後の南北朝鮮の近代化についての考察も入れることが必要であるが，李正雨の主張には当然それも含まれていると理解してよい。しかし果たして，日本の近代性の解明・理解にとって今村の本はほんとに役立つのか。近代や近代性一般について論じる限りにおいては，それなりに意義ある本であるのかも知れない。しかし今村が論じているのは大部分西欧のことであり，日本の歪んだ近代性についての言及はほとんどないと言ってよい。なぜ今村の本が日本理解に有益だと評されるのか，実のところよく分からない。李正雨自身，今村の本の位置づけについては曖昧なままに終始し，ただ今村の思想研究者としての優秀さを記しているのみである。訳文自体，〈目次〉だけをみても，原文の「切断」を「区画」，「規律」を「統制」，「異者」を「他者」と訳しており，これで果たして意味がうまく伝わるのかどうか心配である。

1990 年代の韓国でフランス思想がポストモダンな思想として紹介されたことは，韓国の思想界に「近代」「近代性」の問題を提起したという点で大きな意味をもつ。フーコーやアルチュセール，デリダ，ラカン，ドゥルーズ，ガタリなどの名とともに権力や言語，差異，脱構築などの言葉が流行し，内部/外部，自己/他者，精神/物質，知性/感性，自然/技術（文化，文明），男/女，西洋/東洋などの二項対立的な思考に批判の矢が向けられた。このことは冷静に判断するなら，社会の多面的理解という意味でけっして全否定すべきことではなかろう。しかしそうした流れのなかで，国家や資本主義，労働，階級などといった用語に対する嫌悪感が強まり，それらの分析もおろそかにされるようになったことは，韓国がいまなお民族問題と階級問題に多くの課題を抱えている現実からするとき，そこに否定的評価が伴うのは当然である。

これまで韓国の日本思想受容が日本の文学や近現代史，そして歴史認識に関わるものが多かったとするなら，いまや日本思想の受容は社会科学一

般およびフランス思想その他の領域にまで及んでいる。しかしその一冊である今村の本には，日本の朝鮮支配やアジア侵略に関わる思想分析はほとんど皆無である。当然日本の歪んだ近代性についても何ら具体的な解明はない。とするなら，それは複雑な韓国の近代性の理解についてどんな意味をもつことになるのか。一例をあげるなら，今村の本で論じられていることは，韓国の李珍景（本名：朴泰昊）が論じていることと多くの点で重なる。基本線はほとんど同じと言ってよい。今村はナショナリズムはつねに人種差別的であると批判し，近代の国民国家は差別と排除の構造を内包したままだという。そこから差別と排除をなくすには同一化も排除もない「異者共同体」（翻訳では「他者共同体」），「中心のない共同体」を構築する必要があるという。これは事実上，ドゥルーズなどから学んだ李珍景の思想の到達点とほぼ同じである。

李珍景は1980年代末から90年代韓国の思想史の歩みを最も典型的に示す知識人の一人である。86年に『社会構成体論と社会科学方法論』をひっさげて登場した若き李珍景は，原典に戻ってマルクス主義哲学を理解すべきだと主張して，大塚史学に依拠したウェーバー流マルクス理解，あるいは俗流的マルクス理解を批判し，当時の社会構成体論争において決定的な役割を果たした。以後『主体思想批判 1，2』(1989) などを通じて李珍景は学生運動圏に大きな影響を及ぼしたが，ソ連・東欧圏崩壊後の90年代に入って，マルクス理論の原典中心からアルチュセールへと傾き，ついでフーコー，ドゥルーズへとフランス思想の摂取に急速に傾いていった。その過程で李珍景は，国家や民族，階級の問題を次第に後景に追いやり，いまや「コンミューン主義」を唱えるまでに至っている。『マルクス主義と近代性』（1997年）や『脱走線上の断想』（1998年）に見られるその思想は，資本主義も社会主義もみな近代であり，近代は悪であるという。そこから脱近代が必要であり，そのためには中央集権制，代議制から抜け出て特権化された中心のない組織，つまりコンミューンを作る必要がある。つまり李珍景はこうして，近代の資本主義や国民国家の典型ないし定型から抜け出すためには限りない「脱走」が必要であるといい，それは現実には無政府主義から政治性を排除した文化政治論の主張という意味合いを帯びるものとなっている。

もっともフランス思想を学んだ李珍景は，今村や『逃走論』『構造と力』の浅田彰などとは区別されるべき存在である。李珍景はいまなお学生運動圏と関わりを持ち，また社会の変革を志す新左派的マルクス主義の陣営に属している。それは恐らく李珍景個人の誠実さの現れであろうが，それと同時に韓国の歴史的位置づけによって規定されているとも思われる。こうしたことを考えるとき，韓国で多くの翻訳書が出された柄谷行人や丸山真男などを評価しようとするとき，日本の社会科学が韓国にとって果たしてどんな意味をもつのか，そしてまた日本の西欧学問の摂取がはたして韓国の思想界に有益なものであるかどうかを慎重に推し量る必要がある。

柄谷行人と丸山真男

ここで韓国における柄谷行人の受け入れられ方について述べるなら，基本的には日本が生んだ世界的な文学評論家であり，思想家である（『中央日報』1998. 12. 1.）と，大歓迎の様相である。日本人でありながら最も西洋をよく理解し，批判もする非西洋の理論家であり，西洋近現代思想の枠組みを非西洋人の視線で再解釈し，人類普遍の哲学的問題を精巧に探求する人類共同体主義者である。そして柄谷ブームは出版界が主導してはいるが，たとえば『日本近代文学の起源』は，最近では近現代韓国文学の研究者にとっては最も人気のある外国理論書の一冊として数えられている（『朝鮮日報』—Degital CHOSUN 1998. 12. 13.），と。各種書評を見ると，それらは柄谷に対してきわめて好意的であり，少なくとも批判的な見解はごく例外を除いてはほとんど見られない。実際，柄谷の博学ぶりは賞賛の的となっている。文学はもちろんのこと，哲学，論理学，政治経済学，文化人類学，社会学など，その守備範囲はたしかに広範囲である。

柄谷はもともと，マルクスを一つの作品として読むことを強調する。たとえば『資本論』を読む

場合，史的唯物論とか弁証法的唯物論といった外在的なイデオロギーから出発して，それを確認するために読むのではなく，そうした外形を無視して，一冊の古典として読み込んでいくことが大切であるとする。柄谷のマルクス理解の核心は資本主義を産業資本ではなく，商品資本の形式として把握することにあり，生産そのものより交換に関心をもつ。事実，柄谷は，マルクス主義者が依然として生産過程を重視する古典派的見解を脱し得ていないことを批判しつつ，国家と資本主義への対抗運動を力説するが，それを担うのは共産主義でも社会民主主義でもなく，また市民運動でもアナーキズムでもないと主張する。人びとが生産過程と流通過程に分離されている限り，資本の蓄積運動と資本主義的な生産関係に抵抗することはできないのであり，したがって資本主義そして国家への対抗運動は，トランスナショナルな消費者＝労働者による生産協同組合および消費者協同組合の運動しかないという（『マルクスその可能性の中心』，および「資本主義への対抗運動」『情況』1999年7月号）。

柄谷はマルクスを読み続けてきたが，それはマルクス的な批評性を堅持し続けるためであり，自らはマルクス主義者ではないという。しかし1989–91年のソ連・東欧圏の崩壊で左派・進歩勢力が無力になっていく中で，柄谷は逆にマルクスを新しい思想家として再発見したという。柄谷にとってマルクスはコミュニズムの思想家ではなく，資本主義なるものを徹底的に考察した人物として把握されている。マルクスを批評的視点としつつモダンやポストモダンを考え，しかもそこでの自分の発言がつねに独創的で，たえず新鮮であるように努めてきたのが柄谷であると考えてよい。

こうした柄谷の本は，現実には韓国でどのように読まれているのであろうか。おそらくその第一のポイントは新鮮だということであり，第二は博学であるということだろう。西洋哲学や経済理論などを文学的な比喩や修辞を駆使して圧縮・要約した柄谷の本は，韓国の文学評論家や批評家，若い読者層には深みのある教養書として喜ばれようが，しかし博学は一面において衒学的要素をもっていることを示す。『マルクスその可能性の中心』についての『文化日報』の書評（99. 5. 27）はこの点をずばり突いている。つまり問題は柄谷の思惟が特別に創意に満ちたものというよりは解釈学的立場に終わっていることである。つまり「自国の哲学」を生産するのではなく，「自国の解釈」を提出するだけということ，これが柄谷だけでなく，日本の人文学の限界だと言える，と。

まことにきびしい指摘であるが，じつは柄谷の歴史や文学の理解，とくに明治日本の近代性の理解には重大な問題があるように思われる。これは柄谷だけでなく，韓国で「戦後日本の代表的知性」（『東亜日報』1998. 12. 15）として紹介・受容されはじめた丸山真男の近代日本理解の問題点にも通じることである。いま柄谷に即していうなら，柄谷は『日本近代文学の起源』で，明治20年代の近代文学は，自由民権の闘争を継続するよりはそれを軽蔑し，闘争を内面的な過激性にすりかえることによって，事実上，当時の政治体制を肯定したのであると論じている。つまり明治20年代文学の成果とされる「近代的自我の確立」が自由民権運動の敗北による内面化の道程に端を発し，ある面では積極的な体制建設の一環をなしたということである。この点に関して『創作と批評』の編集長である崔元植は，柄谷は「明治20年代における〈国家〉および〈内面〉の成立は西洋世界の圧倒的な支配下において不可避的であった」と述べ，柄谷がこの事態について「微妙な態度」をとっていると疑義を提起している。つまり「否定を重ねつつ日本的近代の本質に向かって迫っていた彼のまばゆい思惟が，なぜ突然この部分で肯定の弁証法に転換するのだろう？　過去に対する鋭い分析が判断停止と結合する時，現在，日本で起こりつつある事態に介入する現実的な力もまた，弱まるしかないのではないか？」という疑問である。

崔元植は自らが，西欧近代との根本的対決を回避したまま，むしろアジア侵略に走った近代日本と最初にぶつかった韓国の知識人であることを自覚しつつ，民権から国権に転化したという日本の自由民権運動の性格規定そのものを問題にしている。端的にいって，柄谷は民権的ナショナリスト

が日清戦争の時期に帝国主義的ナショナリストに転化したと論じているが，もしかすると自由民権運動自体が民権論の皮をかぶった国権論の強烈な表出でなかったのか，自由民権運動はその闘争の絶頂期においてさえ専制官僚政府と同伴的関係だったのではないか，自由民権運動の中心においても天皇を中心とした日本式大国主義が非常に強烈であったのではないか，というのである（「ヤヌスの二つの顔，日本と韓国の近代—柄谷行人の『日本近代文学の起源』を読んで」『現代思想』第26巻第9号，1998. 7.）。この崔元植の指摘は，日本の社会科学・人文科学における近代日本理解が抱えている問題点を的確にあぶり出している。朝鮮と関わる意味での丸山の問題もまさにここにある。

丸山没（1996. 8. 15.）後，日本では反米主義と反「アジア謝罪外交」を基底にしたナショナリズムが迷走のきざしを強めている。そのなかにあって左派・進歩勢力の知識人のあいだでは，敗戦直後に超国家主義を分析し，国民主義を唱えた丸山の思想が再び関心を呼んでいる。しかしその丸山理解は，一方で戦後日本の社会科学研究における丸山の業績を評価しつつも，他方では丸山の思想研究のあり方そのものに対する疑問の表明ともなっている。それはたとえば，徳川幕藩体制の解体と明治国家の形成，そしてファシズムの形成と戦後日本の再建にいたる過程の思想史研究，とくに国民国家の形成と関連した近代的思惟の成熟と主体的人格の確立という課題に潜む丸山の一国主義的理解に対する批判として提示されている。

もとより「近代主義」の代表的存在であった丸山の眼目は，なによりも天皇制ファシズムの解明であり，その超国家主義の分析をつうじて新たな日本国民の創出を追求することであった。それはいわば，敗戦後の戦争責任論が閑却しがちであった戦前日本の政治機構・社会制度の解明をつうじて，日本人の行動様式を根深いところで規定している心理的な強制力や無意識の慣習的特性を暴き出し，そこから人間主体の近代化・民主化をめざそうとするものであった。しかし最近では，こうした丸山の議論には早い時期から，戦後日本で多くの人びとが熱烈に信じようとした単一民族社会の神話が深く刻印されており，「われわれ日本人」という国民的同一性が即自的に想定されることによって，他者の存在が見えにくくなったのではないかという批判が強くなっている。言い換えるなら，丸山の天皇制ファシズムの解明，および近代的人間＝国民主体形成の課題の設定は，戦前のアジア観を克服する道を切り開きうるものであったかどうかということが問題にされている。しかもそのことは丸山の近代日本，とくに明治の思想展開の把握の仕方と密接に関わっている。

丸山からすれば，明治国家の思想は国権論と民権論の二つの絡み合いで展開していったものであるが，この二つの不可分の原理をバランスよく発展させていこうとする「国民主義」，つまり個人の自由独立に支えられたところの国家的独立・発展を希求することが重要な課題であった。しかし当時，日本の国民的解放・国民的独立は同時に日本の帝国主義的進出と絡み合うという複雑さがあり，そこから日清戦争後はこの二つは分裂し，下から支えられるはずのナショナリズムは，上からの官僚的な国家主義によって吸収されてしまい，政治的なものから逃避する退廃的な個人主義が生じたという。すなわち，国民思想は，個人的内面性に媒介されないところの国家主義と，他方ではまったく非政治的で感覚的・本能的生活に向かう個人主義の二者に分裂し，この国家主義の肥大化がやがて日本ファシズムを準備していった。こうした理解のもとで，丸山は敗戦直後，「ウルトラ・ナショナリズムの支配を脱した現在こそ，正しい意味でのナショナリズム，正しい国民主義運動が民主主義革命と結合しなければならない」と新日本建設の課題を示したのである。

もとより，丸山の思想史研究は一種の非歴史主義的な「理性」主義の傾向を帯びている。しかしそれは別にしても，明治前半期の「国民主義」とアジア侵略を経験した敗戦後の「国民主義」が同じであるはずはなく，そこには日本が経験した植民地支配や戦争体験の分析・思想化という重大な課題があったはずである。事実，近年の丸山研究では，丸山においては「帝国」批判の視座が弱く，戦争責任の問題が省略され，したがって丸山が重視した「国民主義」は実質的には「隠蔽された帝

国主義としての国民主義」であったという認識が徐々に深まってきていると言ってよい（尹健次『日本国民論』筑摩書房，1997年，参照）。

韓国の側でするとき，こうした丸山政治思想の受容はまだ始まったばかりである。しかし日本で学んだ留学生の帰国増加とアカデミズムへの進出，フランス思想受容の漸減と時を同じくする日本思想の地位上昇などと相まって，丸山をはじめとする日本の社会科学は今後順調に韓国に紹介・受容されていくものと思われる。丸山に関する本格的な研究，そして韓国の社会科学研究におけるその消化はこれからの課題ではあるが，丸山のもつ問題点は初歩的な意味ではすでに認識されていると考えてよい。

日本思想受容の意義

近年における日本思想の受容が，韓国の学界に少なからぬ影響を及ぼしていることは想像するに難くない。韓国の学問がアメリカ中心の輸入学問の性格を色濃く帯びてきたことは今さら言うまでもない。欧米の思想はその基盤である欧米社会の現実とは切り離された断片的なものとして，あるいは逆に体系的なものとして導入され，そこでの概念や分析枠に準拠した形で韓国社会は理解されようとしてきた。たとえば韓国の政治学は1970年代以降，近代化論が従属理論に，従属理論が国家論に，そしてそれがまた合理的選択論などにと，結局はつねに外国理論の導入とそれへの追随に終始してきた。

こうしたなかで，日本思想の受容はたしかに新鮮ではある。1995年以降，つまり「解放50年」を超えてはじめてそれが本格化したというのも，日本を醒めた目で見るのに必要な「絶対的な時間」（『ニュースプラス』第175号，1999. 3. 18.）であったかも知れない。また日本思想の受容は柄谷や丸山の著作に代表されるように，日本の歴史や社会を知るだけでなく，韓国にとめどなく流れ込んでくる「西欧思想に対する批判的接近」（『文化日報』1998. 12. 2.）を可能にしてくれる契機ともなる。とくに最近，ポストモダニズムの熱気が冷めたとはいえ，構造主義，ポスト構造主義などのフランス哲学書の出版が相つぐなか，それに関するまともな解説書や批判書が見あたらない状況においては，日本の翻訳書がその代役を果たしてくれることにもなる。その意味で，韓国の知識界では，日本知識人にみられる西欧思想の批判的摂取，自国に対する真摯な内部批判の精神はいちおう共感を呼んでいると考えてよい。

しかしまた，そうした日本思想の受容が大きな問題を抱えていることも事実である。植民地近代を経験した韓国の知性にとって，日本を学ぶことはただちに自らを切開することにつながる。他者としての日本は，同時に自己の内部に存在する日本でもある。しかし日本知識人の自己理解，近代性の理解が歪んだもの，つまりかつての植民地主義を批判する視点が弱く，また戦後日本における過去の清算に鈍感なものである限りにおいて，その思想の受容は韓国の自己理解，脱植民地主義の深化という課題にそぐわないものとなる。民衆の連帯による東アジア共同体の建設という未来像を考えてみても，日本における植民地主義の清算と韓国における脱植民地主義の課題達成は表裏の関係のものである。

今日の韓国知性界では，近代や近代化，近代性，脱（反）近代といった言葉が流行し，また植民地近代や脱植民地主義といった言葉もある程度理解されはじめてもいる。それは世界が植民地主義から多国籍主義の時代へと動きながらも，かえってそのなかで国民国家間の対立・軋轢が増大していることとも関係する。現実に，日本そしてアメリカの強い支配を受け続けてきた韓国社会は今なお，「独占と隷属」を核心のテーゼとする「新植民地国家独占資本主義」の理論枠によって分析・認識されうる状況にあると言われる（金成九『経済危機と新自由主義』1998年，第8章）。その点，今日の日本思想の受容はかつて1960年代後半以降，林鍾国や李泳禧，任軒永，吉眞鉉などによって追求されはじめた「親日派」批判の流れの延長線上にはなく，それと交錯するものでもない。そのことは90年代のフランス思想受容によって一定程度認識されはじめた脱植民地主義の思想が，現在なお「外から」のものにとどまり，かつての植民地そして今日の新植民地の課題解決につながる「内部のもの」として理解されるに至っていな

いことと問題の質を同じくする。

しかしいずれにしろ今や，日本書籍の翻訳・出版を主とする日本思想の受容は時代の流れであり，それは隣国の理解のみならず，韓国自身の自己切開のためにも不可欠のものである。そこでは近代朝鮮で思想の主軸をなしてきた「民族主義」が，帝国主義，国家主義，植民地主義，国民主義，市民主義，脱植民地主義などといった概念と関連して再吟味されるべきだという課題も浮上してこよう。その意味では，今後，各種のすぐれた日本書籍が紹介されつづけ，それが韓日両国，さらには東アジア民衆の相互理解，連帯に役立つものとなることを願うのみである。

* なお本論文は神奈川大学研究奨励助成基金を得て執筆されたものである。

한국에 있어서 일본사상 수용의 문제점

윤 건 차

지난 몇해 동안 한국에서는 일본 서적의 번역·출판이 많아지고 있다. 만화나 대중소설 등은 이미 1970년대부터 상당히 번역·출판되어 왔지만 요즘은 지금까지 많지 않았던 사회과학의 서적들이 간행되고 있는 것이 특징이다. 구체적으로는 마루야마 마사오(丸山真男) 『일본정치사상사연구』(통나무, 1995), 『현대정치의 사상과 행동』(한길사, 1997), 『일본의 사상』(한길사, 1998), 『충성과 반역 : 전환기 일본의 정신사적 위상』(나남, 1998), 카토 슈우이치(加藤周一) 『일본인이란 무엇인가』(소화, 1997), 후지타 쇼오죠오(藤田省三) 『전체주의의 시대경험』(창작과비평사, 1998), 가라타니 코우진(柄谷行人) 『일본 근대문학의 기원』(민음사, 1997), 『은유로서의 건축 : 언어, 수, 화폐』(한나래, 1998), 『탐구 1-3』(새물결, 1998), 『마르크스 그 가능성의 중심』(이산, 1999), 카토 노리히로(加藤典洋) 『사죄와 망언 사이에서 : 전후 일본의 해부』(창작과비평사, 1998), 스즈키 마사유키(鈴木正幸) 『근대일본의 천황제』(이산, 1998), 이마무라 히토시(今村仁司) 『근대성의 구조』(민음사, 1999), 코모리 요우이치(小森陽一)·타카하시 테츠야(高橋哲哉) 편저 『국가주의를 넘어서』(삼인, 1999) 등이다.

논문에서는 먼저 한국에 있어서 일본 서적이 번역·출판되는 의미에 대해서 고찰하고 그 다음에 한국과 일본의 사고방식의 차이에 관해서 논했다. 이제 한국에 있어서 일본 서적의 번역·출판은 시대의 흐름이고 그것은 이웃나라를 이해하기 위해서뿐만 아니라 자기자신을 이해하는데 있어서도 없어서는 안되는 중요한 것이다. 이러한 작업속에서는 근대조선에서 사상의 기축이 되어왔던 '민족주의' 가 제국주의, 국가주의, 식민지주의, 국민주의, 시민주의, 탈식민지주의 등의 개념들과 관련해서 재음미되어야 할 과제도 부상할 것이다. 그러한 의미에서는 앞으로 다양하고 가치있는 일본서적이 계속 소개되고 그것이 한일 양국, 나아가서는 동아시아 민중들의 상호이해, 연대에 기여 되기를 바란다.

キーワード　韓国　日本思想　社会科学